日中近代文学交流史の中における田漢

——田漢と同時代日本人作家の往来

小谷一郎

一九二〇年代の日中近代文学交流史を考えてみる時、今後田漢の名を忘れることはできないであろう。中国近代劇運動の始祖の一人に数えられる田漢は、これまでも演劇人、映画人としてよく知られてきた。だが彼は日中近代文学交流の中においても大きな役割を果たしていたのである。田漢は、中国を訪れた同時代日本人作家と交流した、最初の「新文学」者である。その「原点」は田漢の日本留学時代に求められる。田漢はまた内山書店が日中近代文学交流の「窓口」となった後も常にその交流の前面に立っていた。それだけに田漢の交友の広さは目を見張るものがある。それは二十七年六月田漢が再び来日した時の足取りからうかがえよう。小論はそうした田漢と同時代日本人作家の往来を跡付け、それが持つ意味、日中近代文学交流史の中における田漢の位置などを明らかにしようとしたものである。(1)

(一)

田漢と佐藤春夫の関係からはじめたい。田漢と佐藤春夫の往来は田漢が一九二一年十月十六日佐藤春夫の家を訪ねたことではじまった。この日のことは田漢の日記『薔薇之路』(泰東図書局 二十二年五月)十月十六日の項に詳しい。田漢と佐藤春夫の関係は、その後の郁達夫と佐藤春夫の往来、佐藤春夫と中国との関係全体の点からも注目すべき事柄である。(2)だがとりわけ二人の関係は、その後中国を訪れた同時代日本人作家がはじめて中国の「新文学者」と接触を持つ「原点」となっている点において、あらためて見直されてしかるべきであろう。

『薔薇之路』によると田漢はこの日昼食を取った後、東京高等師範学校の学生服を着て上目黒の佐藤春夫の家を訪ねた。日記には、「高師の学生か」「何を勉強しているのか」

と聞いてくる佐藤に腹を立て、弟子入りしにきたのでもないし、自分を「普通の中国人学生」「文学青年」として扱うべきでない、と記されてある。日記からは、佐藤と自分とを対等に見なそうとする田漢の気概などが感られておもしろいのだが、そうしたことはいまは措く。佐藤は、十月に新潮社から出たばかりの短編小説集『幻燈』を披露する。そこに〈改造〉一月号に掲載された「黄五娘」が入っていたことから、田漢と佐藤と間で話が弾むようになった。田漢はこの日佐藤からすすめられるままに夕食を馳走になり月が皎々と照る頃になってから帰る。田漢にとって佐藤との出会いが満足のいくものだったことはいうまでもない。田漢は日記に「今日の談話は近頃数少ない愉快な談話だったし、佐藤君の印象も近来にない満足な印象であった」と記している。

ところでこの日の田漢と佐藤春夫の会話で注目すべきは、佐藤が夕食後に「来年の春に上海に行き、一年住むつもりだ」と話していることであろう。これは佐藤の単なる「挨拶」ではなかった。牛山百合子編「佐藤春夫年譜」[3]によると、佐藤は翌二十二年十二月室生犀星の『忘春詩集』の序文を書いた後、「約半年間の中国旅行に出立の予定で、暮れから正月にかけて神戸に滞在」した。その時佐藤の脳裏には九月に帰国した田漢、七月に帰国した郁達夫の顔などが浮かんでいたであろう。だがこの時、佐藤の弟秋雄が入院し、佐藤は東京に戻らざるを得なかった。佐藤がもしこの時訪中していれば、彼が中国を訪れた同時代日本人作家として、中国の新文学者と交流した最初の人となっていたはずである。実際に佐藤が中国を訪れたのは、それから五年後、二十七年七月のことだった。

しかしこの田漢と佐藤との関係は、先にも述べたようにその後中国を訪れた日本人作家と中国人作家を結び付ける「原点」となった。二人の関係をもとに、同時代日本人作家としてはじめて中国を訪れ、彼地の「新文学」者と接触したのは村松梢風である。[4]

村松梢風は一九一七年「琴姫物語」が〈中央公論〉「説苑」欄の常連執筆者、「朝妻双紙」などの「情話もの」、「評伝もの」の作家として知られていた。村松は二十三年三月三十一日長崎丸で日本を発ち、五月下旬まで上海を中心に滞在した。その旅行記が「不思議な都〝上海〟」(〈中央公論〉二十三年八月号)である。これは後に単行本『魔都』(小西書店 二十四年)に収められた。上海を称して「魔都」と名付けたのがこの人である。村松はこの時、佐藤春夫が田漢宛に書い

た紹介状を持っていた。佐藤はその辺の事情を小説「人間事」(『風雲』四十一年八月　宝文館所収)の中で、「帰国して後も田は時おり才気の溢れた手紙をくれた。けれども筆無精な私は悪いと思いながら一ぺんも返事をしなかった。それだのに村松が上海に遊ぶことになった時、私に誰か紹介しろというので私は田を紹介した」と書いている。

村松が中国旅行を思い立ったのは二十一年に中国を旅した芥川龍之介に刺激されたからであり、同時に村松が作家として新境地を開きたいと考えていたからであった。[5] 村松が佐藤の紹介状を持って「支那の新らしい青年文士」田漢を「中華書局編輯局」に訪ねたのは、村松がまだ西華徳路の日本旅館豊陽館に泊まっていた時というから、四月上旬のことだったろう。村松と田漢は会うとたちまち意気投合し、田漢の家に案内された。その後村松は田漢の家に招待され湖南料理を馳走になり、郭沫若、成仿吾、少年中国学会会員の宗白華等に会っている。村松はこの日「近いですから」と郭沫若の家にも呼ばれた。郭沫若はのちに日本に亡命した折、村松を訪ね、住いの世話を頼んでいるが、[6] 郭沫若と村松のそうした関係はこの時にできたものである。さらに村松はこの「二三日後」四川料理店「美麗」に招待され、田漢、郭沫若、成仿吾に郁達夫も交え愉快なときを過ごした。

作家村松にとって中国行は「完全以上に成功」だった。村松はこの後も毎年のように中国を訪れ、「情話もの」「評伝もの」に加え「支那もの」とでも呼ぶべき一連の作品、旅行記を書いていくことになる。

(二)

それから三年後、谷崎潤一郎が中国を訪れた。谷崎は二十六年一月上海を訪れ、二月十九日まで上海に滞在した。その旅行記が「上海交遊記」(〈女性〉二十六年五、六、八月号)、「上海見聞録」(〈文芸春秋〉二十六年五月号)である。[7]

谷崎は、本来なら佐藤春夫の紹介状を持っているはずであった。だが当時谷崎と佐藤は、谷崎の妻をめぐる問題で二十一年三月から絶交状態にあり、谷崎は佐藤を頼むわけにはいかなかった。旅行の世話をしたのは谷崎の友人で当時三井銀行上海支店長をしていた土屋計左右である。[8]「上海交遊記」に出てくる「旧友のT氏」が土屋である。

紹介状をもっていない谷崎が中国の新文学者と接触できた経緯はこうである。

谷崎は上海に着いてまもなく、土屋が谷崎のために功徳林で開いた宴席に招かれた。参会者は「三井銀行並びに物

産の社員」その他土屋が懇意にしていた人々十数人だった。谷崎はその席で「ブローカーの宮崎君」から「現在の支那には青年文士芸術家の新しい運動が起こりつつあって、日本の小説や戯曲など、目欲しいものは大概彼等の手に依って支那語に訳されている」「嘘だと思うなら内山書店へ行って聞いて御覧なさい」といわれて驚いた。谷崎は十八年にも中国旅行をしていて、中国の「新しい文士創作家」に会いたいと思いながらも果たせなかったという経緯があったからである。谷崎はそれほどまでに日本の文学が紹介されていようとはまったく予想していなかった。谷崎はこの後「M君」、すなわち大阪毎日新聞の上海支局員村田孜郎の案内で上海内山書店を訪ねた。

内山書店は一九一七年大学目薬参天堂の販売員として行商に出ることの多かった完造の妻、美喜の内職としてはじめられた。開店当時は魏盛里の自宅玄関先を利用してキリスト教関係の書籍を扱うささやかなものだったが、分け隔てない貸し売りなどのサービスが中国人顧客の信頼を得、二十四年自宅向かいの空き家を買い入れ独立した書店を営むまでになっていた。内山は谷崎の申し出を快く承知し、中国側でも谷崎の来訪を新聞で知り、会いたがっている人が多いといって、一日内山書店の二階で「顔つなぎの会」を開いてくれた。その日集まった人々は中国側が田漢、郭沫若、欧陽予倩、謝六逸、方光燾、徐蔚南、唐越石、日本人では村田孜郎、宮崎儀平、支那劇研究会の塚本助太郎、升屋治三郎等である。先の「ブローカーの宮崎君」が宮崎儀平である。

このメンバーは谷崎の訪中から約一ヶ月後、二十六年四月に谷崎、秋田義一の紹介状を持って中国を訪れ、谷崎と同じように内山書店で「顔つなぎの会」を開いてもらった金子光晴の時と基本的に変わりがない。金子の時には郭沫若は三月に郁達夫等と広東に行き、謝六逸は病気で出席できなかったものの、中国側からは田漢、欧陽予倩、方光燾、画家の陳抱一夫妻等が出席した。[9] これらの人々が当時内山書店に出入りしていた「常連」であることはいうまでもないであろう。と同時に、これらの人々は当時内山が関与していた「支那劇研究会」の中国側関係者でもあったと考えられる。

支那劇研究会は関係者である塚本助太郎の回想、内山完造の「古雑誌から」(『上海汗語』華中鉄道株式会社　四十四年三月　所収)などに詳しい。[10] それによると、支那劇研究会は塚本や内山が関係していた上海日本人ＹＭＣＡの文化活動の一環として組織された。「支那劇研究会章程」が定めら

れたのは「大正十二年十二月十四日」である。同会はおそらくこの頃に出来たのであろう。中心的メンバーは塚本助太郎、菅原英太郎(筆名、升屋治三郎)、竹内良男の三人で塚本は北京で辻聴花の薫陶を受けたことがあり、竹内は「臉譜」の研究家として知られていた。支那劇研究会は「同人」「会員」「会友」からなっていた。「章程」には、「同人」とは同人費を納め「本会の諸事業」に参加する「基本メンバー」、「会員」とは「同人」が主催した講演会、観劇会などに当日会費を払って参加するだけの人、「会友」とは「本会を援助し又は本会と特種の関係にある人」と定められている。おそらく支那劇研究会に関与した中国側の人々は「同人」あるいは「会友」として遇されていたのであろう。内山の「古雑誌から」には、同会の機関誌〈支那劇研究〉の創刊号(二十四年九月)から第五輯(二十五年十月)までの「目録」が収められている。[11] 中国側の関係者はこの「目録」から割り出せる。それによると、支那劇研究会には、謝六逸、欧陽予倩、唐越石等が参加していたらしい。田漢がいつ頃から内山書店に出入りするようになったのかはよくわからない。ただ田漢が二十六年四月村松梢風に宛てた書簡「上海通信」(〈騒人〉第一巻第三期 二十六年六月)をみると、田漢は二十六年一月支那劇研究会の例会に呼ばれ講演している。「上海通信」には「支那劇研究会の同人が今年一月の例会に僕を招待して何か演説をやりましたが、晩餐会が済んでから竹内、菅原の諸兄は一つ上海の日本カフェー荒しをやらうじゃないかと云って cafe Lion、cafe Sunlight を始めもう一ツ何とか云ふ小さな珈琲館をも訪問しました」とある。したがって田漢はこの頃にはもう支那劇研究会の「同人」ないし「会友」的存在だったであろう。魯迅も加わり内山完造が主催した「文芸漫談会」は支那劇研究会を「もっと多方面に広げたような性格の会」[12]といわれる。田漢はこの時にも内山書店に関わる一人として会に出席していた。このように田漢は、佐藤春夫との個人的な関係をベースに、内山書店が日中文化人交流の「サロン」となる前から同時代日本人作家と行き来していただけでなく、内山書店が「サロン」となり、日中近代文学の交流の「窓口」となった後も、常にその交流の前面に立っていたのである。

(三)

先にも述べたように、田漢は一九二七年六月「南京国民党政府総政治部宣伝処芸術科顧問電影股長」の肩書きで、もと南京政府の軍人だったという雷震天鳴と共に来日し

た。来日の目的は映画撮影に要する技師、器材確保のためといわれている。田漢が帰国後に書いた「日本印象記」(〈良友〉画報　第十九期　二十七年九月)によると、田漢はこの時切符の手配などすべてを内山書店に頼み、内山を介して事前に電報で谷崎と村松に訪日のことを伝えた。谷崎は当時「神戸市外阪急岡本」に住んでいた。谷崎はその時改造社の仕事で上京し、佐藤春夫の家に宿泊していたが、留守宅から田漢来日との知らせを受け、急ぎ神戸に戻った。佐藤と谷崎は二十六年六月に絶交状態を解消、再び「友情」を取り戻していた。田漢は二十二日に神戸に到着、谷崎の家に逗留し京都などを見物した後、二十六日に上京、二十九日まで東京に滞在した。東京滞在中の足取は、田漢「我們的自己批判」(〈南国月刊〉第二巻第一期　三十年)に引かれている「日記」[13]、佐藤春夫が田漢来日に取材して書いた小説「人間事」(前出)などに詳しい。いまそれをまとめてみると次のようになる。

六月二十六日　朝九時半に東京着。佐藤春夫、村松梢風、〈文芸戦線〉派の里村欣三、葉山嘉樹等が東京駅に出迎える。新築されたばかりの佐藤邸に向かう。その後佐藤夫妻、娘みよ子、村松等と多摩川に遊び、夜、村松と騒人社を訪ね山水楼で夕食、九時前に佐藤宅に帰る。

二十七日　朝八時に〈文芸戦線〉派の人が迎えにきて同派の劇団前衛座の舞台稽古を見る予定だったが流れる。昼に山水楼で村松と待ち合わせ、佐藤も同行して会食。村松の手配で〈読売新聞〉写真撮影。山水楼店主宮田武義の頼みで揮毫。その後佐藤、村松と改造社に行き、社長山本実彦と会う。山本、翌日宴席をはり田漢を招待したいと申し出る。改造社で偶然、野口米次郎と会う。その後報知新聞社、朝日新聞社を訪問。佐藤は雑誌〈新潮〉の合評会に出席、そこで芥川龍之介と会い翌日の宴に芥川を誘う。田漢は村松の案内で築地小劇場に行き、前衛座のアプトン・シンクレア原作「プリンス・ハーゲン」を観る。会場で秋田雨雀、藤森成吉、高田保、里村欣三等と出会う。

二十八日　田漢「朝早いうちから〈文芸戦線〉の同人のひとりが来て」一緒に出かける。中河与一宅訪問、そこで偶然吉屋信子と会う。〈文芸戦線〉派の人々と会い、「南京行」の事情などをめぐって議論。秋田雨雀宅訪問。金子光晴宅を訪問、金子夫妻を菊池寛主催の田漢歓迎会に誘う。銀座か伝通院で開かれた菊池寛主催の田漢歓迎会に出席。出席者菊池寛、横光利一、川端康成、片岡鉄兵、佐々木茂策、十一谷義三郎、金子光晴夫妻等。同日かつて妻易漱瑜

と住んだ高田馬場諏訪神社側の「月印精舎」を訪ね、以前世話をしてくれた「辻夫妻」と会う。夜、改造社の山本が主催した宴席に出席。芥川、村松、佐藤、山本等が出席。

二十九日　山水楼で武者小路実篤、村松梢風、佐藤春夫、秋田義一等と会食。武者小路から彼の個人雑誌〈大調和〉の「亜細亜号」について相談を受ける。その後「三共ビルディング」の「エンプレス」で開かれた高田保の渡欧送別会に出席。「九時二十分の汽車に乗る筈だのに、田は八時になるのに帰らなかった」。夜、佐藤の見送りを受け大阪に。大阪で一週間ほど谷崎の家に泊まり、その後帰国。

このように田漢は、わずか四日間の東京滞在中にこれだけ多くの日本人作家と会った。これは田漢だからできたことであろう。ここにはそれまでの田漢と同時代日本人作家との往来がそのまま凝縮されているといっていい。以下、私はこれまで触れ得なかった田漢と同時代日本人作家の関わりのいくつかについて簡単に触れ、小論の締めくくりとしたい。

田漢のこの度の来日は、田漢が五月に南京政府に入り、「南京国民党政府総政治部宣伝処芸術科顧問電影股長」の肩書きで来日したことによって、日本側にも「波紋」を巻起こした。とりわけ〈文芸戦線〉の人々の驚きは大きかった。二十六日東京駅に〈文芸戦線〉派の人々が出迎えたのは、次のような経緯があったからである。この年の四月〈文芸戦線〉の里村欣三と小牧近江が汎太平洋反帝会議に出席するため四・一二クーデター後の上海に渡り、政情不安定のため会議が中止となった後、かわりに「支那の無産派文学者」に会うことを計画、紆余曲折をへた後、郁達夫、田漢等と接触・交流していたのだった。里村と小牧はそれを「上海通信」のかたちで「青天白日の国へ」(〈文芸戦線〉二十七年六月号)にまとめ、四・一二クーデター後の上海の情況を生き生きと国内に伝えることに成功した。〈文芸戦線〉六月号は巻頭に郁達夫が彼らのために書いた「訴日本無産階級同志」を配し、続いて郭沫若、郁達夫、魯迅等八名が署名した「中国文学者の英国知識階級及び一般の民衆に対する宣言」を掲載、「青天白日の国へ」の他に佐野袈裟美「支那国民革命の危機」、里村・小牧等の「新軍閥蔣介石の正体?」が掲載されている。里村、小牧はそこで「かくして張作霖でない蔣介石は支那の反帝国主義革命をまんまと列国帝国主義に売ったのである!が、支那のプロレタリア革命はそのまま泣き寝入りになるものでない」といい、「我等の先輩である支那革命を支持せよ!」(「新軍閥蔣介石の正

体?」)と呼びかけた。これは上海での寄せ書きに「全世界無産階級文学此(ママ)連合起来!」と記した田漢、郁達夫等に対し、彼らなりに応えたものであったろう。小牧はまた田漢との約束に応じ「田漢君の新映画」(〈都新聞〉五月十七日～十九日)で、当時田漢が制作中だった映画「到民間去」を紹介した。ところがこともあろうに、その田漢が蔣介石の南京政府に入り、「南京国民党政府総政治部宣伝処芸術科顧問電影股長」として来日したのである。里村、小牧をはじめとする〈文芸戦線〉派の人々にとってこれは何としても究明しなければならない問題であった。二十八日の〈文芸戦線〉派との話し合いはこの問題をめぐってのものである。田漢の再来日はこうした問題を孕んでいた。佐藤の小説「人間事」も当然のことながらこうした事情に触れている。佐藤はそこで田漢が南京に行った理由を、田漢の妻易漱瑜の死とその父易梅園の暗殺にからめて描き、田漢と〈文芸戦線〉派が「衝突」した原因についても、田漢が本来なら〈文芸戦線〉派が用意した宿に泊まるべきところをその年に新築されたばかりの「ブルジョワ作家」佐藤の家に泊まったことにあるかのように描いた。これが〈文芸戦線〉の人々を刺激し、小堀甚二「佐藤春夫と田漢君」(〈文芸戦線〉十二月号)の一文となった。そして田漢はというと、先の「我們的自己批判」の中で、佐藤の「人間事」のためにのちに「私が受けた迷惑は大変なものだった」、村松が「方向転換」といい、〈文芸戦線〉の前田河広一郎が「反動」と誹っていたために二十八日秋田雨雀からソ連行きを誘われても返事ができなかった、と書いている。田漢がこの時なぜ南京政府に入ったか、それは田漢研究としてかなり重要な問題を孕んでいるのだが、いまここでそれに立ち入るだけの余裕はない。これについてはいずれ稿を改めるつもりなので、ここでは上記の記述だけに止めておきたい。(14)

二十七日田漢は佐藤等と改造社を訪ねた。これは二十六年七月〈改造〉「夏期増刊現代支那号」に自身の作品が収録されたお礼である。田漢はここに戯曲「午飯の前」を日本語で発表した。

田漢と秋田雨雀が出会った時のことは、田漢の日記『薔薇之路』(前出)二十一年十月十一日の項に出てくる。田漢はそこで秋田の「国境の夜」を読んだ感想などを記した後、「秋田氏は数年前島村、松井の芸術座全盛時代からその名を知っていたが、今年の夏休みコスモ倶楽部が第一回講演会を開いた時、講演者控え室ではじめて会った」と書いている。二十八日田漢が訪ねた時、秋田は永年の夢だったソヴィエト旅行に出る直前で、パスポートを見せながら田漢

の同行を求めた。田漢がいう同行できなかった事情とは先に見た通りである。

田漢と菊池寛の関係も田漢の日本留学時代に遡る。田漢「卡利格里博士的私室」(『田漢散文集』上海匯文閣　三十六年所収)によると、田漢はドイツ表現主義の作品を映画「カリガリ博士」の他にいま一つ見たという。それは、「舞台での成功」を示す沢田正二郎の「カレーの市民」である。彼はそれを方光燾と「新富座」で見たという。いまそれを当時のパンフレットなどをもとに明治・大正の新劇運動を掘り起こした田中栄三の『明治大正新劇史資料』(演劇出版社　六十四年十二月)と付き合わせてみると、「カレーの市民」は「ドイツ表現派ゲオルグ・カイゼル作」というふれ込みで菊池寛「父帰る」、通俗劇「国定忠治」と一緒に二十一年六月五日から明治座で上演された。田漢が菊池寛の「父帰る」を見たというのもおそらくこの時であろう(15)。田漢はこの後『菊池寛戯曲集』を入手し、「海の勇者」、「屋上の狂人」などを少年中国学会の機関誌〈少年中国〉に翻訳し、二十四年にはそれらを『日本現代劇選第一集・菊池寛劇選』(中華書局　二十四年十二月)にまとめた。田漢は「父帰る」を見た頃、有楽座で開かれた大講演会に行き菊池寛の講演を聞いたというが(16)、二人に個人的往来があったかどうかについてはいまのところ何もわかっていない。

同じ日、田漢は中河与一の家を訪ねている、中河と田漢の関係は、二十六年八月中河が上海、蘇州、南京、杭州などを旅した時に出来た。その旅行記が「上海瞥見」(〈文芸春秋〉第四巻第十期　二十六年十月)、「上海熱」(〈騒人〉二十七年四月号)である。中河は「上海熱」の中で、中国旅行の動機を、「私は碧梧桐氏や芥川氏や村松氏の支那紀行を読んでから随分と行ってみたいと思っていたのだが、去年春、谷崎潤一郎氏の上海交遊記なるものを一瞥するに及んで断然行ってみる事に決めた。で向こうに渡る前に佐々木味実三君に伴われて村松梢風氏をお訊ねした。そして村松氏からいろいろな注意を受けたのだが、その時には支那の新進作家田漢や二三の人への紹介状を書いてもらった。同席の田中貢太郎氏も『与一君中河持参』という調子で、上海の文人島津四十起氏や井上紅梅氏への紹介状を書いて下さった」と書いている。こうして旅立った中河は、上海で田漢たちと会った。中河は「上海瞥見」の中で、「そのうちに私は俳人島津四十起氏に逢った。南国電影劇社の田漢、顧頡剛、唐槐秋、唐越石の諸君に逢った。支那劇研究の塚本菅原両君に逢った。正金銀行の萩原君、上海毎日の霜田君、西山君、上海日々の後藤和夫君等に逢った。これらの人々

が歓迎会をしてくれたり、方々へひき廻してくれたりした」と書いている。中河は村松が経営していた騒人社のルートで中国に行った。このルートは、先にも述べたように、田漢と佐藤春夫の関係から出来たものである。

最後に田漢と武者小路実篤との関係について触れておきたい。二十九日田漢は山水楼で武者小路実篤等と会食した。ここで注目すべきことは実篤が田漢に彼の個人雑誌〈大調和〉「亜細亜号」について話していることであろう。佐藤の「人間事」には「『何しろ、こっちは支那のことなどはわけて何も知らないと来ているんだから』彼はそんな風にいいながら、彼の雑誌『大調和』で亜細亜号というものを出すに就いて、寄稿者を現代支那の文士から選んだり、またそれの世話をすることを田に頼んだ」とある。〈大調和〉「亜細亜号」とはその年の十月に出た〈大調和〉「亜細亜文化研究号」のことで、魯迅の小説「故郷」、余上沅「中国演劇の現在及将来」、郭沫若「革命と文学」、胡適「菩提達磨」が訳出された。この雑誌は魯迅の作品が日本ではじめて翻訳されたことで知られるのだが、訳者については不明のままである。その雑誌の刊行に田漢が何らかの関わりをもっていたことは注目に値しよう。とはいえ、それ以上の解明はまだ進んでいない。

以上、駆け足のようになったが、日中近代文学交流史の中の田漢、田漢と同時代日本人作家との往来について見てきた。すでに見たように田漢は、内山書店が日中近代文学交流の「サロン」となる前から、佐藤春夫との個人的な関係をもとに中国を訪れた同時代日本人作家と交流してきた。また内山書店がその「窓口」となった後も、田漢は交流の第一線に立っていた。田漢と中国を訪れた同時代日本人作家との往来は、その幅の広さからいっても群を抜いている。二十七年十月魯迅が上海に居を定めた。内山書店を介した魯迅と同時代日本人作家の往来はここからはじまる。魯迅の場合がそうであったように、田漢と同時代日本人作家の間にどんな問題があったのか、それらの一つ一つはあらためて検証されてしかるべきであろう。田漢と同時代日本人作家の往来に対する解明はいまようやく緒についたばかりである。それはまだ「点」であって「線」ではない。小論でせめてその事実だけでも整理しておきたいと思った理由の一つでもある。

注

(1) なお小論は近く人民文学出版社から出版予定の資料集『田漢在日本』(中国社会科学院文学研究所劉平氏との共著)に収めた拙稿「田漢与日本——以在日時的田漢及其与日本作家的往

来為中心」の一部を小論の主旨に基づき加筆、訂正したものである。

(2)「佐藤春夫と中国」をめぐる諸問題については和光大学〈人文学部紀要〉第十七号（七八年）所載の共同討論「佐藤春夫と中国」（のち丸山昇・伊藤虎丸・祖父江昭二編『近代文学における中国と日本』汲古書院　八十六年　に再録）に詳しい。二十年近くも前のものだが今回あらためて読み返し教えられるところが大きかった。

(3)『佐藤春夫全集・第十二巻』（講談社　七十年三月）所収

(4) 村松梢風と中国とについては拙稿「村松梢風と中国――田漢と村松、村松の中国に対する姿勢などを中心に」（一橋大学〈一橋論叢〉第百一巻第三号　八九年）年を参照いただきたい。また村松梢風については村松暎『色機嫌・女・おんな、また女――村松梢風の生涯』（彩古書房　八十九年五月）に詳しい。

(5) 村松梢風「梢風物語」（『現代作家伝』新潮社　五十三年五月　所収）。芥川龍之介は二十一年三月から七月まで大阪毎日新聞の海外視察員として中国を旅した。その旅行記が「上海遊記」（〈大阪毎日〉二十一年八月、九月）などで、のちに『支那遊記』（二十五年十一月）にまとめられた。村松はのちに書評「芥川氏の『支那遊記』を評す」（〈騒人〉創刊号　二十五年四月）を書いているが、これは出色の『支那遊記』評だと思う。なお芥川と中国については祖父江昭二「近代中国の文学者と中国芥川龍之介の場合」（〈中国研究〉七十五年一月号）などの論究がある。

(6) 郭沫若「跨着東海」（『郭沫若全集・第十三巻・海濤集』人民文学出版社　九十二年九月　所収）。

(7) 谷崎と田漢等の交流について触れたものとして、丸山昇『上海物語』（集英社　八十七年十月）、祖父江昭二「近代日本の文学者と中国(2)　谷崎潤一郎の場合」（〈中国研究〉七十五年二月号）などがある。

(8)『谷崎潤一郎全集』（中央公論社　六七年）所収、二十五年十二月二十六日付谷崎、土屋計左右宛書簡。そこには「多分年内に（大晦日頃）上海へ遊びに行こうと思って居ります」「それで何かにつけ、大兄の御尽力を仰ぎ度、最初四五日は宿屋住まいをしなければなりませんが、宿屋は日本旅館でなく、支那人経営の洋風ホテルが望ましく、勝手ながらこれも御配慮を煩わし度存じます」とある。

(9) 金子光晴「南支の芸術界」（〈週刊朝日〉二十六年十一月、『金子光晴全集・第八巻』中央公論社　七十七年　所収）。なお金子光晴と中国について触れたものに星野雪雄「金子光晴と魯迅」（中国文芸研究会〈野草〉第二十一号　七十八年）などがある。

(10) 塚本助太郎と内山嘉吉の対談「老板と魯迅さんの思い出」（『魯迅の思い出』社会思想社　七十九年九月　所収）、内山完造『花甲録』（岩波書店　六十年九月）など。なお本文に引いた内山の「古雑誌から」は入手が困難で、明星大学の千野拓政氏を煩わし、千野氏所蔵の『上海汗語』から該文をコピーしていただいた。記してお礼申し上げたい。

(11) この「目録」は第五輯の「終り」にあった「各号の目次」から内山が書き写したもの。〈支那劇研究〉は散逸してしまっており、未見である。

(12) 内山完造「文芸漫談会の思出」(『魯迅の思い出』前出　所収)。

(13) 二十六日から二十八日までの東京滞在中の「日記」。だがこれはなぜか、その月が「六月」ではなく「七月」となっている(本文に引いた「日本印象記」では「八月」)。これが単なる誤植ではないことは、田漢が本文でも「我是七月三十一日離日本的」と書いてることで明らかであろう。しかもこの「日記」は自身の南京行を説明するために引かれたものである。このためそれを信じ、田漢再来日を「七月」とするものがいまでも多く見受けられる。これが「六月」であることは当時の新聞記事「田漢氏来朝す」(〈東京朝日新聞〉二十七年六月二十三日)などで明らかである。これらの記事については上海同文書院時代に魯迅の講演を聞き、その思い出などをも記しておられる元朝日新聞勤務の笠坊乙彦氏からご教示を得た。記して心からお礼申し上げたい。

(14) 里村・小牧の「青天白日の国へ」、田漢の「南京行」、佐藤春夫と郁達夫、佐藤の「アジアの子」(『風雲』本文出　所収)について触れながら、日本文学の側から三十年代前半と後半の日本近代文学の情況を対比し日本文学の問題点に言及したものとしては、祖父江昭二「日本文学における一九三〇年代――ひとつの見取り図」(〈文学〉岩波書店　七十六年四月、その後副題を「いまひとつの見取り図」と改め『近代日本文学への探索』未来社　九十年五月　に収録)がある。

(15) 田漢「『菊池寛劇選』序」(中華書局　二十四年十二月)。

(16) 注(15)に同じ。

(埼玉大学)